

- 加藤政勝, 1981: GMS 風ベクトルとレーウィン・ゾンデとの比較, 天気, 28, 83-92.
- Sadler, J.C., 1976: A Role of the Tropical Upper Tropospheric Trough in Early Season Typhoon Development, Mon. Wea. Rev., 104, 1266-1278.
- , 1978: Mid-Season Typhoon Development and Intensity Changes and the Tropical

- Upper Tropospheric Trough, Mon. Wea. Rev. 106, 1137-1152.
- Shimamura, M., 1981: The Upper-Tropospheric Cold Lows in the Northwestern Pacific as Revealed in the GMS Satellite Data, The Geophy. Mag., 39, 119-156.



久米 庸孝 著

自然と歳事

この「自然と歳事」は、単行本ではない。「年中行事の歴史学」(遠藤元男・山中裕編, 昭和56年3月弘文堂刊, A5判 414頁, 定価4,200円)の中の一節である。しかしその内容は、日本の年中行事が、日本特有の農業気象から起ったものであることを、著者の専門の気象学と造詣の深い歴史学との立場から論じたもので、気象学史的にもユニークな着想と思われるから、その内容を紹介しておきたい。

イネは東南アジアの各地に作られる。しかし北緯30度以南では、気温は年を通じて25°C以上であり、いつ種子をまいても、その時期を問わず収穫することができる。しかしそれ以北の各地、中国ならば杭州、西安以北、それに日本では、冬は10°C以下にも気温は低下するので、イネの栽培は必然的に年1回に限られる。3~4月に田を起し、5月に種子をまき、6月の梅雨をまって田植をし、7~8月の高温による成長生育をへて、秋の9~10月に収穫する。この主食物であるイネ栽培の行事が中国の年中行事を生み、同じ気象条件下にあった日本の年中行事の母体となっていく。「年」という字は穂の実った「イネ」を形どったものであり、「年」それ自体が「みのり」を意味していたという。

しかし気象には変動がある。夏に低温で多雨の年もあ

れば、高温で少雨の年もある。気候の経過の順調で、豊かな稔りを念願する行事も、当然派生してくる。雨の少ない年には黒馬を、多い年には白馬を供えて水の神に祈る、祈雨止雨の歳事が重要なものとなっていく。今日この日である5月5日は、梅雨をひかえてのあまごいの日であったという。

イネの授精をさまたげる野分け(台風)は、農業災害の最たるものであることは周知である。これが二百十日をめやすとしたのは、それがイネの花時であったことによるのはいうまでもないが、台風が命にかかわった航海者には、早くも1634年(寛永11年)の航海術書に「野分の風と二百十日」を警告した文献があり、これが二百十日を厄日とする嚆矢であろうと著者は指摘している。

以上この中の、2, 3の重なる記述を紹介したが、年中行事の起源を農業気象的に、これほど明解に説明したものはなかったと思う。貴重な文献である。

この「自然と歳事」は、著者が昨年(昭和55年)の秋から年末にかけて記されたものと思うが、これが上梓されたときには、著者は不起の病床にあった。私あてに、これを読んでみたくれとのお便りをいただいたが、それもすでに代筆で、ご自分で筆をとることさえかなわなかったのである。歴史がお好きで、よく勉強されていた著者は、気象学史の新分野をさらに広く開拓されることを念願とされていたに違いない。はからずもこの一文が絶筆となり、その深い学識を抱いたまま逝かれたことが、なんとしても残念でならない。ここに一文をつづって、著者のご冥福を心からお祈りする。(阿藤隆夫)